冬ゆきの　いのち伝えん　春は花
夏ほととぎす　秋はもみじ葉

角館　火振りかまくら　（写真：藤島　源）

神聖な火で田んぼの厄を払うとともに、五穀豊穣・無病息災・家内安全など、一年の無事を祈願する。そして冬を乗り越え、春を待つ。

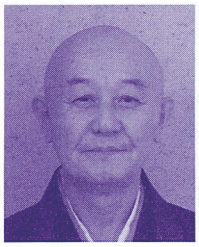
同門

平成23年2月25日
第34号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長　岩館祖芳
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）亀谷隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

命つたえん　春は花

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長　岩館祖芳



ふりましたネー、それに寒いこと。なにが温暖化なんでしょう。むしろ、近年にはないキビシイ冬となりました。マメだんすか!!お聞きするだけヤボですネ。〝冬雪の〟ですものネ。講員さんは、心がまえが違います。でも無理はダメですヨ。

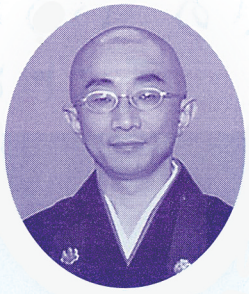
もう二十年になりますか、特派で奈良県にうかがった時のこと、たどたどしい関西弁で『センセの所は、〝ユキ〟が沢山ふるんですよネ！一面の銀世界！スキーもできてウラヤマシイ!!』沖縄出身、本土に来て二年目。あこがれの雪への思いが実った喜びを、うっとりとした面持ちで更に続けられた。『ユキッて音がしないネ。』『手のひらの上でスーっと消えるんですネ。』などなど。熱い思いを感性豊かに、格調高く話され、ついうなずいてしまい、ふと気がついて、「んだども。フブギ横がら下がら吹いで、マヅゲにシガマ。口あげでればユギつもる。山のだげ降ったユギおろし、ユギ片づげでクタクタ。金もおまげにバグダイかがる。おらほで、アンダみたく〝ユキ〟なんて云わね。うらみがましぐ〝ユギ〟てしゃべる。」と言えればいい男ですが……。そんな思いの私に向かい『おばあさんが、スコップを杖がわりにし、雪に埋もれそうな我が家を見ながら、〝じき春だ!!もう少しのシンボウだ〟と云ってるのをテレビで見て、雪国の人の大変さを、強さを学びました。春を迎える喜びの深さに心打たれました。』と話してくれました。

キビシサを乗り越えてこそ本物の喜びが得られると言います。「くじけないで下さい。負けないで下さい。」私達は「いとも尊きみ仏の」み教えに支えられて生きています。お唱え下さい。必ず〝力〟を得られます。さびしいなんて思わないで下さい。歌詞をお読み下さい。生きる力がいっぱい示されています。梅花は生涯の友、大きな支えです。

時おり射す陽の光に春の足音が感じられます。風邪を引かないようお心がけ下さい。

大会などで皆様の元気なお姿、真心こもったお唱えに会えることを楽しみにしております。本年もよろしくお願い申し上げます。

新任梅花主事ごあいさつ



男鹿市船越　清松寺住職
佐藤徳祐

当年の冬は、大変な豪雪となりました。県内梅花流の皆様には、日々ご精進の事と拝察申し上げます。

今般、平成二十二年十二月十日で任期満了となられた奥山芳寿前梅花主事の後任を務める事になりました佐藤徳祐と申します。もとより浅学非才の身であり、梅花初心者に、この重責が務まるかどうか心配でなりませんが、先達各位の築いてこられた足跡に学び、誠心誠意努力して参りたいと存じます。

私事ですが、平成二年秋に御本山を乞暇して、約十年サラリーマンをしておりました。理解のある職場でしたので、朝は檀家さんで月経のお勤めをしてから出社することができました。先代は、小僧さんの時から、梅花とご縁があり、お寺でも講を作って活動しておりましたが、私には、職場の事もあり、強くは勧めませんでした。

私の梅花とのご縁は、御山の修行の間に名古屋別院の役寮さんから「聖号をお唱えできるように」と手解きを受けたのが、最初だったと思います。

私のお寺のある十三教区は、梅花講のない御寺院さんでも、一般の檀信徒さんを集めて、梅花特派講習会が行われます。聖号・三宝御和讃・追善供養御和讃など、鈴鉦なしで童謡を小学校で勉強するように教えて下さいます。昨年までの三回は、私も参加する機会を頂きました。僅かしかない体験ですが、曲の優しさ、歌詞の心が、唱える者を癒してくれるように感じました。

先日、宗務所での梅花檀信徒講習に参加させて頂きました。講師は伊藤道人師範と佐藤晃心師範でした。先代の梅花法具を母から借り受け、鈴鉦を用いての梅花を初体験致しました。とても難しく、特に正行御和讃は所作も曲も難解で、あまりの不出来さにて、短く区切った節をたどたどしく真似るだけで精一杯でした。

学び始めたばかりの者ですが、精進してまいりたいと存じます。皆様のご法愛とご指導ご支援を賜りますよう伏してお願い申し上げます。

●平成二十三年度全国大会のお知らせ

今年五月二十五・二十六日の両日、梅花流全国奉詠大会が島根県出雲市のカミアリーナにて開催されます。

秋田県からもふるってのご参加をお願い致します。

テレホン梅花

☎〇一八一八七三一七六七六（ハナミ　ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります。）

三月
五日　四摂法（和）
十二日　花供養（和）
十九日　供華
二十六日　澄心

四月
二日　花祭（和）
九日　歓喜（一）
十六日　歓喜（二）
二十三日　慶祝（和）
三十日　お授戒（和）

五月
七日　道環
十四日　渓声（永平一）
二十一日　渓声（総持一）
二十八日　伝心

六月
四日　誓願（和）
十一日　報謝（和）
十八日　地蔵（和）
二十五日　慈念

七月
二日　慕古
九日　明星
十六日　不滅
二十三日　観音（和）
三十日　浄光

※ご意見、ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇-〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八-八七三-二六七五）

梅花のつどい

県北梅花一泊研修会開催

～おなじみ大滝温泉 富士屋ホテルにて～

秋も深まりつつある十月二十五、二十六日の両日、大館の大滝温泉富士屋ホテルで県北にては三回目となる梅花一泊研修会が行われた。雨のそぼ降る肌寒い日であったが今回も百人余の参加者を迎えて和やかに、それぞれの師範先生の講習を真面目に楽しみながら曲を反復練習。初心者コース受講者も多く、法具の組み方、解き方を熱心に学ぶ。夜、温泉入浴後はお楽しみの参加者打ち解けての夕食懇親会。お元気な桜田勝夫さんの名調子にて始まり、このほどめでたく結婚された新婚ほやほやの鈴木師範の祝宴と連なって大いに盛り上がった。翌日朝は寒さ沁みて初雪を頂く。富士屋ホテル恒例のチャペルでの朝課（朝の祈り）。神仏に御詠歌をお唱えして平和と幸せを祈る。二日目の研修も滞りなく、雪も深々と降る中講習は続く。近年椅子机の使用者が増えいよいよ高齢化を感じますがこうして参加して頂きうれしく思います。まずは来年もお元気にて梅花を続けられますよう、又、再会できますよう、「冬ゆきの命伝えん春は花～」を保坂師範に全体講習して頂いて閉会致しました。

梅花講員一泊研修会に参加して

清源寺梅花講 出雲 光

十二月十六日～十七日の二日間に渡り、梅花講講員の一泊研修会が横手市の「かんぽの宿・横手」で行われ参加させて頂きました。お寺以外の研修は初めてなのでわくわくしながら行きました。

前の日は雨が降り吹雪いていたので当日は厚着をしていっぱい着込んで行きました。それでも秋田駅を出た頃には天気も良くなり日も差してきました。けれども横手駅に着いた時は列車が一時間位おくれて着き開講式にぎりぎり間に合ったようです。（それとも私達を待っていてくれたかも）

私は昨年けがをしてしまって正座することが出来なく机やいすが必要なので、講師の先生や事務局の人には大変お世話になり受講することができました。気軽な雰囲気の中で楽しく、また笑いを交えながら一人ひとり丁寧に手を取ってご指導を頂きました。イロ、ツヤ、アヤは頭でわかっていても奥が深くなかなかできなくて、やればやるほど難しい気がします。講習会に参加することで、少しでも一つでも覚えたいと思っていましたし、またたくさんの友達が出来るので楽しみでありました。

講師の先生からは六十分の中で御茶飲み五十分、練習十分でもいいから毎日続けることが大事だと教えられ、やはりそうだと思いました。

講師先生方、またお世話をして下さいました先生皆様、東林寺寺族様、本当にありがとうございました。出来ましたらこの次もまた参加させて頂きたいと思います。心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

梅花流秋田県奉詠大会開催

～三種町琴丘総合体育館にて～

秋田県に梅花流が根付いてから創立五十五周年を迎え、今回はこれを記念しての全県開催となりました。

正午からの開催に県内から続々と千名余の講員さんが参加。天気も青天夏日にて館内は非常ベルが誤作動するほどの熱気に包まれた。

各教区合同の十三登壇と師範詠範の奉詠を終え表彰式。曹洞宗管長猊下より各梅花関係でご尽力された師範詠範皆様方へ授与と、入講三十年以上の講員さんに表彰状が贈られ、大会は同行同修の喜びを詠（うた）って円成しました。

退任される奥山梅花主事の挨拶

表彰される皆様方

梅花のふるさと

笑顔あふれるみほとけの国

怒りを捨てて

～詠讃歌の生まれた風景　〈その十二　彼岸御和讃〉

彼岸御和讃

心を定めて腹立てず
祖先に祈りこめてこそ
彼岸を迎う親も子も
ああいまひらくこの悟り
嵐もしばし雪もやむ

作詞　丘　灯至夫

◇彼岸と此岸◇

あちらの岸と書いて「彼岸」。これに対してこちらの岸と書いて「此岸（しがん）」と言います。向こう側とこちら側、あの世とこの世、みほとけの世界と私たちの世界。みほとけの世界と私たちの世界はなにが違うのでしょうか。私たちの世界は、まだまだ、悩みや苦しみ、憎しみや悲しみなど続いていますが、みほとけの世界は、それらがすべて消え去った世界であると言うのです。「おさとり」と「迷い」、これが二つの世界の違いということになります。

そこで、一週間という期間を定めて、この世にいながら、みほとけの世界と同じ気持ちで過ごしてみよう、という取り組みを行ないます。私たちの心がほとけさまと同じになれば、この世は「彼岸」になるはず。なぜならほとけの住む所を彼岸と言うのだから。言ってみれば「仏の世界実現運動強化週間」、それが「お彼岸を迎える」ということになります。

昼と夜の時間が、ちょうど同じになる春分の日と秋分の日を中心に、年二回のお彼岸がありますが、その日は、どちらにもかたよらない中道の心にかなうというので、仏教では古くから尊ばれた日でした。

一週間の彼岸を無事にほとけさまの心で過ごすことができたなら、もう一週間延ばしてみる、それができたら、今度はもうひと月、いや一年、二年、そして一生と、これも言ってみれば、「仏の世界実現のための永久運動」と言うことになりますね。

◇彼岸へ渡る◇

此岸から彼岸へ渡る、私たちがみほとけの世界を実現するための具体的な実践項目として、仏教では「六波羅密（ろっぱらみつ）」と呼ばれる、次の六つが定められています。

布施　もの惜しみせずに人に分け与える
持戒　きまりごとをしっかり守る
忍辱　はずかしめに堪え怒りの心を持たない
精進　一生懸命たゆまず努力する
禅定　静かに心を落ち着ける
智慧　ものごとに惑わされない正しい考え

『彼岸御和讃』は、この六つの教えをもとに作

此岸から彼岸へ

春彼岸、夕暮れに「けずり花」を供え
お墓の前で火を焚く（一部の風習にて）

詞されたものでした。六波羅密というと、いかにもむづかしそうで、いかめしく聞こえますが、いずれも私たちのふだんの暮らしの中で、取り組むことのできるものです。『彼岸御和讃』三番の歌詞には、このうちの禅定と忍辱についてふれています。静かに心を定めて、怒りに我を見失わないように…。

仏教では、貪（むさぼり）・嗔（怒り）癡（おろかさ）の三つを三毒と呼んで、仏教徒がまず第一に取り組むべき目標としてこの三つを退治することを掲げています。なかでも「嗔恚＝怒りの心」は、お坊さんになってからでさえもなくすることのむづかしい毒の一つです。

◇怒りをしずめるおまじない◇

昔、あるお寺の老住職が、彼岸になると、お寺に集まったお檀家さんに、よく次のようなお話をしていました。

「お彼岸が来たら、こんなことにがんばってみなさい。“よし、この一週間は絶対に腹を立てないぞ”と誓うのだ。仏教では怒らないことも立派な徳の一つ。もし一週間一度も怒らなかったら、これはもう大変な修行ができたことになる。でも実際はむづかしい。人はちょっとしたことでもすぐムカッとしたり、イラっとしたりするからな。

そこでよいことをおしえよう。腹が立ってきたなと思った時に唱える呪文がある。“オンニコニコハラタテマイゾソワカ”これを七回唱える。するとスっと怒りの心が消えてゆく。

なに？そんなのウソだって。それなら実際にやってみなさい。それ。どうだ、消えたろう。そんな簡単には行かない？そんな時はこの呪文を二十一回唱えるのだ。はいもう一度。

どうだ。なに？そんなにたくさんじゃ何回唱えたかわからなくなる？ふむ、その通りだな。でもさっきまで何で怒っていたのかも一緒に忘れてしまっただろう。はっはっはっ」

と、なんとも煙にまいたような話でした。でもそんな話の中に、怒りの心なんて忘れてしまいなさい、と諭していたのかもしれません。

◇彼岸が来た◇

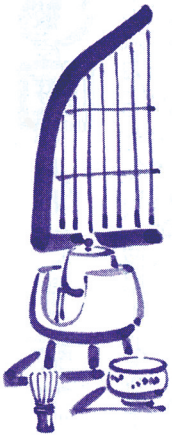
寒さと雪で大変だった冬も、彼岸を迎えるころになるともう終りが見えてきます。冬の長い雪国秋田では、春のお彼岸は心待ちにしていた季節の到来です。どっさり積もった雪の下で、土は温もりをたくわえ、日だまりでは、とけた雪の間からふきのとうが顔を出しはじめます。「嵐もしばし雪もやむ」という梅花の歌声が、うれしそうにお寺の中にひびきわたる時候です。

陽射しがここちよく暖かくなりはじめ、行き交う人の表情に笑みが浮かぶようになります。「花笑う」という季節のことばのように、人の心も笑顔で満たしてゆきたいですね。

【十一面観音の大笑面】

あまり知られていないが、十一面観音の顔の一つ、大笑面は頭の真後ろにある。その名の通り大笑いの表情である。さまざまな困難をのりこえ、仏道を成就した喜びの顔とも言われる。こんなとりすましたところなどなにもない仏の顔も、仏教の本当の一面かもしれない。

みんな！梅花やってみネイガー おらほの梅花講



薬王山（やくおうさん） 寿仙寺

住所　大館市比内町扇田
設立　昭和三十五年
講長　小西　靖麿
講員　六名

寿仙寺梅花講の紹介をさせて頂きます。多い時は十七名講員として登録されておりましたが、現在は六名で活動しております。

主な活動の場は、四月から十一月にかけて毎月十八、二十八日に行われます。観音講・両祖講と十二月の成道会、そして三月二十七日に催されるお涅槃会などです。十八日、二十八日はご近所の方二十人ほどがお集まりになり、お互いの近況や四方山の事に話を咲かせております。

成道会は年末のお楽しみとして講員さん以外にも日ごろ嗜まれた歌や踊りが飛び出します。

趣が変わってお涅槃会は、近隣のご寺院様が参加される行持ですので、程良い緊張感の中、宝田寺梅花講の応援と共に行持に華を添えて下さいます。

寿仙寺梅花講の発足は昭和三十五年頃と聞いております。

前列が寿仙寺の講員さん方
（昭和４１年の写真）⇨

祖父鳳寿和尚と妻・荻（おぎ）
梅花講、観音講の方々
⇦（昭和４８年の写真）

⇧ 鳳寿和尚没後、先師靖雄和尚の代
昭和５７年入講の方々
（昭和５６年の写真）

右写真は昭和五十六年八月二十五日能代で開催された奉詠大会のもので、この時は「三宝御和讃」を経典のみのお唱えだったようです。現在の梅花講を築かれたベテランの方達ですが、当時の初々しさが感じられます。

私自身、名ばかりの講長で大変申し訳なく思いますが、皆様とても練習熱心で、冬以外お寺によくお集まり下さいます。

当面は六名の活動でありますが今後とも御詠歌に精進致したく存じますので、どうか宜しくお願い申し上げますと共に紹介の機会を頂きましたこと、御礼申し上げます。

紹介者　講長　小西　靖麿

写真で見る基本作法

～（その13）紫雲における特別所作～

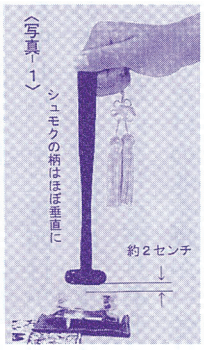
前回（と言っても平成16年）は「空鉦の留意点」までを取り上げました。皆さんが平常お唱えする紫雲には多くの特別所作が含まれています。今回は「空鉦の留意点」を再掲載すると共に続きの特別所作を解説させて頂きます。

A 撞木の所作

❶空鉦とは「恭敬（くぎょう）」の表現です

恭敬とは「つつしみ敬うこと」。紫雲一仏両祖の「南無大恩教主」「南無釈迦如来」「南無道元禅師」「南無瑩山禅師」等、とくに尊敬の念を表す個所でこの所作を行います。印で表す。「な」「しゃ」は打鉦せず二拍目で撞木をつき、三、四拍目で鈴を鳴らす。

シュモクの柄はほぼ垂直に、鉦面の約二センチ上にかざす



〈写真－1〉シュモクの柄はほぼ垂直に

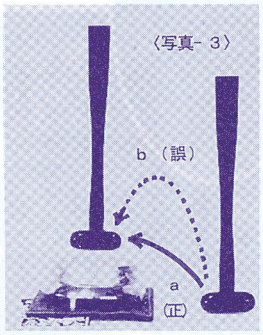
シュモクの柄が鉦面中央に対してほぼ垂直になるように、鉦面の上にかざし、拍頭で停止します。この時、鉦面とシュモク頭の間隔は約二センチとします〈写真－1〉。

※柄を斜めにして、シュモク頭だけを鉦面にかざすのではありません〈写真－2〉。

〈写真－2〉シュモクの柄をななめにしてシュモク頭だけを鉦面の上にかざすのではありません

鉦面上までのシュモクの動き方

定位置についた状態から、鉦面の約二センチ上へと、シュモク頭がごく自然に移動しますa。いったん上方へ引き上げて、上から鉦面上に押しつけるような動きとならないようにしましょうb〈写真－3〉。

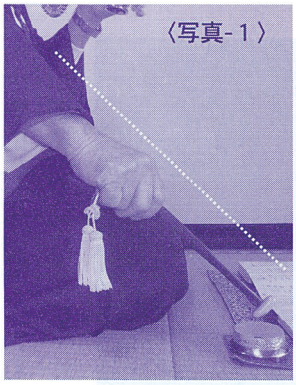


〈写真－3〉

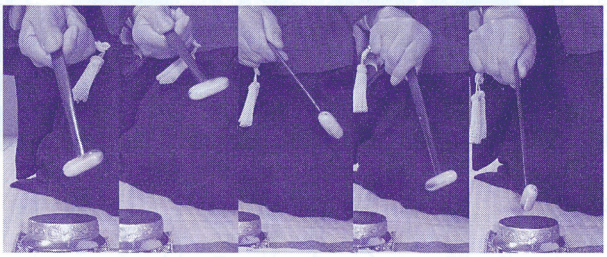
❷一心帰命の所作

一仏両祖に対して深い恭敬の表現。

「チン」と打鉦し終わった時、撞木は前腕と一直線上になるように固定して持つ〈写真－1〉。

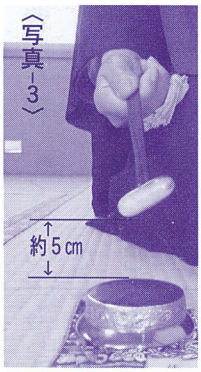

〈写真－1〉

撞木頭の角度を徐々に変えながら左から上に卵型の線を描くようにして鉦面の上まで返す。（この時、腕はほとんど左右に動かさず、撞木頭は両ひざの中心を越えない）〈写真－2〉。


〈写真－2〉

鉦面中心上約五センチに撞木頭をやや右に傾けさせ保って止める。なお、この撞木の所作は一拍間でなされ、鉦面上で止めた時、気音「な」ととなえる。

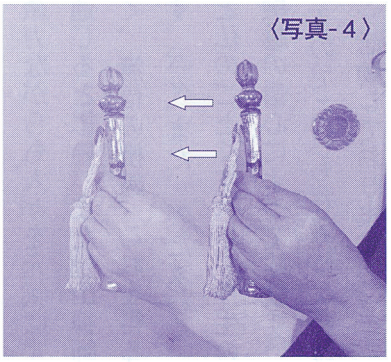
☆「な」は「南無（すべてを一仏両祖にお任せする）」の「な」であり敬虔に行ずる〈写真－3〉。



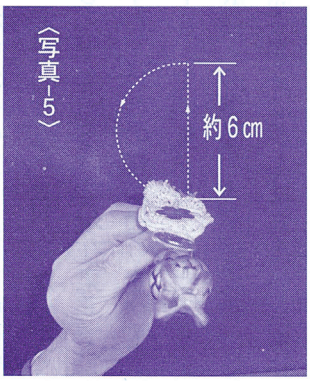
〈写真－3〉

B 鈴の所作

二拍目で撞木をついた後、三拍目で鳴鈴す（ただし鈴を引かずに前方に出す）の後、一泊間で元の位置に引き戻す〈写真－4〉。


〈写真－4〉

次の二拍間で前方から左方へ直径六センチの半円相を描いて戻って「しゃ」の空鉦に移る。なお、この一連の鈴の所作は拍ごとに停止せず恭しく滑らかに行う。〈写真－5〉。



〈写真－5〉

ちょっと　ぶじょほう　～梅花つれづれ～

闇を照らします

そして『明るい世の中を作ります（LEDで…）』

大館市花岡　信正寺住職
蔦谷　達徳

「最近梅花をやっているの？たまには顔を出してよ！」梅花流師範養成所同期の方や、先輩同行同衆諸兄からここ何年かこんな感じで言われ続けています。大変失礼しております。というのも大館青年会議所入会からはじまって『シャイニングストリートプロジェクト』という事業を始めてしまったからです。

今回で四回目のこの事業は青年会議所で知り合ったメンバーを中心に、十二月四日から大館市立総合病院脇の木枯れた街路樹にイルミネーションを施し、『何もないまちを誇りあるまちにしたい。寒くて辛いだけの冬を暖かい冬にしたい。まちの人々の笑顔が見たい』そんな思いを小さなLEDイルミネーション一球一球に託した事業です。あえていうなら梅花が身口意の意に働きかける供養であるなら、この事業は身に働き掛けている供養というところでしょうか。

この事業をはじめたきっかけは、地元の青年会議所に入り、その中でこのまちの問題点は何か、基幹産業の衰退、人口の流出、何よりも住民意識の低下等、自分なりに感じたが故でした。そして行動を共にしてくれて、背中を押してくれる仲間たちに出会ったことでした。

内容的には全国で行われているイルミネーション事業と大差はありませんが、いくつかのこだわりを持ちました。①当初から街路樹にやさしく消費電力の少ないLED球を使い環境に配慮する。②あまり行政の予算を当てにしない。（頼り切ってしまうと予算が削られると事業が成り立たなくなる）③小口の浄財を多くの市民から集め自分たちのイベントとして誇りを持ってもらう。④そしてなにより参加してくれた人々に楽しんでもらう。⑤現在東北で二番目の規模ですが、いつの日か通りすべて（約千五百メートル）で開催する。などですが、まだまだ発展途上の事業ですが市民の一灯が百尺竿灯を照らすまでがんばりたいと思います。

多くの人達の協力を得て、すべて一から始めた事業です。「よくやるな～」と言われますが、道元禅師は『檀越施主を恭敬し、檀越施主に慈心するのは、既に是れ、如来世尊の教勅なり。』と申しております。このまちに住まう私が、微力ながらも人々を元気にすることはこれに通じると思い、また瑩山禅師も『仏のたまわく、篤信の檀越、これを得る時は仏法断絶せず、云々。また、のたまわく、檀那を敬うこと仏のごとくすべし…今生の仏法修行はこの檀越の信心によって成就す』と申しておりますのでこれも菩薩行と心得て（勘違いして…）活動しております。

梅花とは余り関係の無い話を長々と書きましたが、近況とともに、梅花に携わっている皆様へのお詫び（言い訳）とさせていただきます。

追伸　豪雪により、被害に遭われました方々には心からお見舞い申し上げます。